

麻 生 遺 跡

—蒲生郡蒲生町上麻生所在—

1989. 3

滋賀県教育委員会

財団 法人 滋賀県文化財保護協会

『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 X VI - 4 麻生遺跡』

正誤表

P 7 の第4図 土壌遺構図及び土層堆積図の訂正

1. 耕土	1. 耕土
2. 床土	2. 床土
3. 淡青灰色砂質土	→ 3. 淡青灰色砂質土
5. 暗灰褐色土	4. 灰褐色土
6. 暗茶褐色土	5. 暗灰褐色土
7. 暗灰色泥土	6. 暗茶褐色土
8. 茶褐色土	7. 暗灰色泥土
	8. 茶褐色土

麻 生 遺 跡

——蒲生郡蒲生町上麻生所在——

1989. 3

滋賀県教育委員会
財団 法人 滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県教育委員会では、活力のある県民社会、生き甲斐のある生活を築くための一つとして、文化環境づくりに取り込んでいます。特に、文化財保護行政にたずさわるものとして、近年の社会変化に即応し県下の実情や将来あるべき姿を見定めつつ、文化財の保護と保存に努めております。

先人が残してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々に至る貴重な宝でもあります。このような大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深い御理解と御協力を得なければなりません。

ここに、昭和63年度に実施しました県営は場整備事業に係る発掘調査の結果を取りまとめましたので、御高覧のうえ今後の埋蔵文化財の御理解に役立てていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施に御理解と御協力を頂きました地元の方々、並びに関係機関に対して厚く御礼申し上げます。

平成元年3月

滋賀県教育委員会
教育長 西 池 季 節

例　言

- 本書は、昭和62年度県営は場整備事業に伴う蒲生郡蒲生町麻生遺跡の発掘調査報告書で、昭和62年度に発掘調査し、昭和63年度に整理調査を実施したものである。
- 本調査は、県農林部からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、（財）滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
- 発掘調査にあたっては、蒲生町教育委員会の協力を得た。
- 本書で使用した方位は、新平面直角座標系VIによった。また標高はTP（東京湾平均海面高度）を用いた。
- 本事業の事務局は次の通りである。

昭和62年度

滋賀県教育委員会

文化財保護課長 服部 正
課 長 補 佐 田口 宇一郎
埋蔵文化財係長 林 博通
" 技師 木戸 雅寿
管理係主任主事 山手 隆

昭和63年度

滋賀県教育委員会

文化財保護課長 堀出 亀与嗣
課 長 補 佐 小川 啓雄
埋蔵文化財係長 林 博通
" 主任技師 木戸 雅寿
管理係主任主事 西野 喜隆

(財) 滋賀県文化財保護協会

理 事 長 吉崎 貞一
事 務 局 長 中島 良一
埋蔵文化財課長 近藤 滋
調査三係長 兼康 保明
" 技師 宮崎 幹也
總 務 課 長 山下 弘
" 主任主事 松本暢子
" " 東浦 喜子

(財) 滋賀県文化財保護協会

理 事 長 吉崎 貞一
事 務 局 長 中島 良一
企画調査課長 近藤 滋
調査第一係長 大橋 信弥
" 主任技師 宮崎 幹也
總 務 課 長 山下 弘
" 主任主事 松本暢子

- 本書の執筆・編集は、調査担当者の宮崎幹也がおこなった。
- 出土遺物や写真・図面については、滋賀県教育委員会で保管している。

目 次

1.はじめに	1
2.麻生遺跡の調査	3
3.まとめ	15

挿 図 目 次

第1図 麻生遺跡とその周辺	2
第2図 調査区位置図	4
第3図 調査トレンチ造構図	5
第4図 土塙造構図及び土層堆積図	7
第5図 F地区第1造構面	10
第6図 F地区第2造構面	12
第7図 F地区第3造構面	14
第8図 出土遺物	15

図 版 目 次

- | | |
|-----------|------------|
| 図版 1 (上) | 調査前状況 |
| (下) | 調査前状況 |
| 図版 2 | 北区全景 |
| 図版 3 | 北区遺構配置状況 |
| 図版 4 (上) | 北区全景（西より） |
| (下) | 北区 |
| 図版 5 (上) | 北区遺構検出状況 |
| (下) | 北区柱穴群 |
| 図版 6 (上) | 北区土塙群 |
| (下) | 北区土塙群 |
| 図版 7 (上) | 土塙 |
| (下) | 溝 |
| 図版 8 (上) | 土層断面（南より） |
| (下) | 溝 |
| 図版 9 (上) | 南区遺構検出状況 |
| (下) | 南区全景 |
| 図版 10 (上) | 土塙 |
| (下) | 土塙 |
| 図版 11 (上) | 南区検出遺構 |
| (下) | 南区検出遺構 |
| 図版 12 (上) | 空中写真測量実施風景 |
| (下) | 発掘調査風景 |

1. はじめに

麻生遺跡は、蒲生郡蒲生町上麻生に位置し、中世麻生莊の故地として知られる集落遺跡である。麻生莊そのものは、莊城を蒲生町内の大字岡本・上麻生・下麻生・大森・田井に括るもので、その規模は麻生遺跡の範囲を大きく上回るものである。麻生莊については、下麻生所の山部神社に、その一端を記す「山部神社文書」が残されており、莊の復原的考察が盛んに行われている^①。

麻生遺跡の所在する蒲生郡蒲生町は、湖東平野南部を貫流する日野川を琵琶湖より約15km遡った中流域に位置する。蒲生町内の平野部は日野川と、その支流である佐久良川とによって形成された沖積低地で構成される。この平野部の周囲には、佐久良川と日野川の間の日野丘陵、佐久良川以北の布引丘陵、日野川以南の水口丘陵が延びる。これらの丘陵は、いずれも標高200m~400m程度の低丘陵であり、古琵琶湖層と呼ばれる粘土・礫・砂を主とした淡水成の地層によって構成されている。日野川は先の日野川と水口丘陵を侵しながら流れ、右岸の蒲生町内に著しい河岸段丘を形成している。麻生遺跡は、この日野川右岸第2段丘上に立地しており、第1段丘と約1.5m~2.0mの比高差を持つ。

日野川右岸第2段丘上には、蒲生町堂田遺跡・田井遺跡・麻生遺跡・外広遺跡・吳塚塚遺跡・日野町田寺遺跡・同下森遺跡等が、約1~2km間隔で立地しており、集落遺跡の過密地帯となっている。なお琵琶湖の標準水位84.371mに対し、麻生遺跡は標高約129m~134mを測る。

麻生遺跡の調査は、昭和60年度の県営は場整備に先立って実施されており、東西約550m・南北約330mの範囲を対象として、合計約12,000m²にわたって集落遺跡を検出している。この発掘調査では、I期（繩文時代晩期）・II期（弥生時代後期）・III期（古墳時代中期）・IV期（奈良時代前期~平安時代前期）・V期（中世前期）・VI期（中世後期）の計6時期に及ぶ遺構が確認されている。これらの遺構の多くは、一層の遺構面上で検出されているが、I期の繩文遺構のみ下層遺構として確認されており、重層関係を示している。

昭和60年度調査のうち切土F地区においては、遺構の重層関係が認められており、上層にII期~V期の遺構が存在し、下層にI期の遺構を確認した。しかしながら、調査の後半期において、この下層遺構の下方より、別の遺構面が検出されたため、この最下層遺構面を一時的に保存した後、昭和62年度に調査する運びとなった。これによって従来の呼称に変更が生じ、上層遺構面を第1遺構面、下層遺構面を第2遺構面、最下層遺構面を第3遺構面と改めることとする。

したがって本報告は、F地区第3遺構面の調査を記したものである^②。



第1図 麻生遺跡とその周辺（約2万5千分の1縮尺）

- 1. 麻生遺跡
- 2. 市子遺跡
- 3. 堂田遺跡
- 4. 平塚遺跡
- 5. 田井遺跡
- 6. 塔の堂遺跡
- 7. 外広遺跡

2. 麻生遺跡の調査

昭和60年度に実施した麻生遺跡発掘調査のうち切土F地区（約2,700m²）と呼ばれる地点が、今回の調査対象地にある。

第4図の下方に記した土層断面図は、昭和60年度調査時のものであり、この調査地区的標準土層堆積を示している。土層堆積は、第Ⅰ層（耕土）・第Ⅱ層（麻土）・第Ⅲ層（淡青灰色砂質土）・第Ⅳ層（褐色土）・第Ⅴ層（暗灰褐色土）・第Ⅵ層（暗茶褐色土）・第Ⅶ層（茶褐色土）と統き、明茶灰色土の地山に至る。

このうち第1造構面にあたるのは第Ⅲ層の上面であり、弥生時代後期から平安時代後期にかけての造構が存在する。次に第2造構面にあたるのは第Ⅶ層の上面であり、その上の第Ⅵ層が、この造構面に伴う遺物包含層となる。時期的には繩文時代晩期後半の馬見塚式から五貫森式に併行するものが多い。最後に第3造構面にあたるのは地山直上であり、第Ⅳ層がこれに伴う造構面となる。第3造構面は、その北寄りの一部を昭和60年度に調査しており、若干量の土器とサヌカイトの剥片が出土し、柱穴様の造構を検出している。

今回の調査は、昭和60年度の調査地点より南側の南北約30m・東西約40mの約1,200m²が対象となった。当該地は、昭和60年度に第II造構面を調査した後、第III造構面を保護した形で、ほ場整備工事が実施されていた。

調査の方法は、耕土の都合上から、調査地区を南北に二分割し、それぞれを北区・南区と呼称し、北区より調査を進めた。調査は、0.4m²級バックホウによって第Ⅶ層上面を再検出した後、人力により第Ⅶ層を掘り下げ、造構検出にあたった。また造構の実測については、北区・南区の二度に分けて気球写真測量を行った。

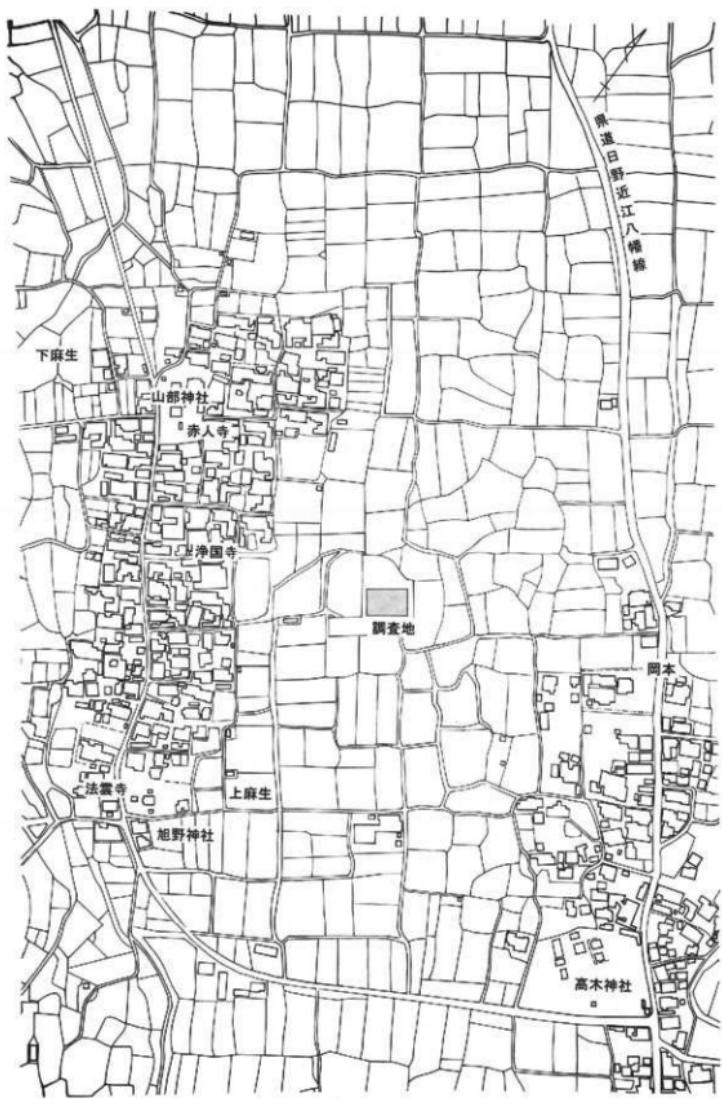
現地調査の期間は、昭和62年11月11日より12月20日までである。

調査では、第Ⅶ層（茶褐色土）の精査に力を注いだが、若干量の土器細片が認められたのみで、前回の調査に見られたサヌカイト剥片の出土は一切認められなかった。この第Ⅶ層の堆積は、北部に厚く、南部に薄いことが明らかとなった。

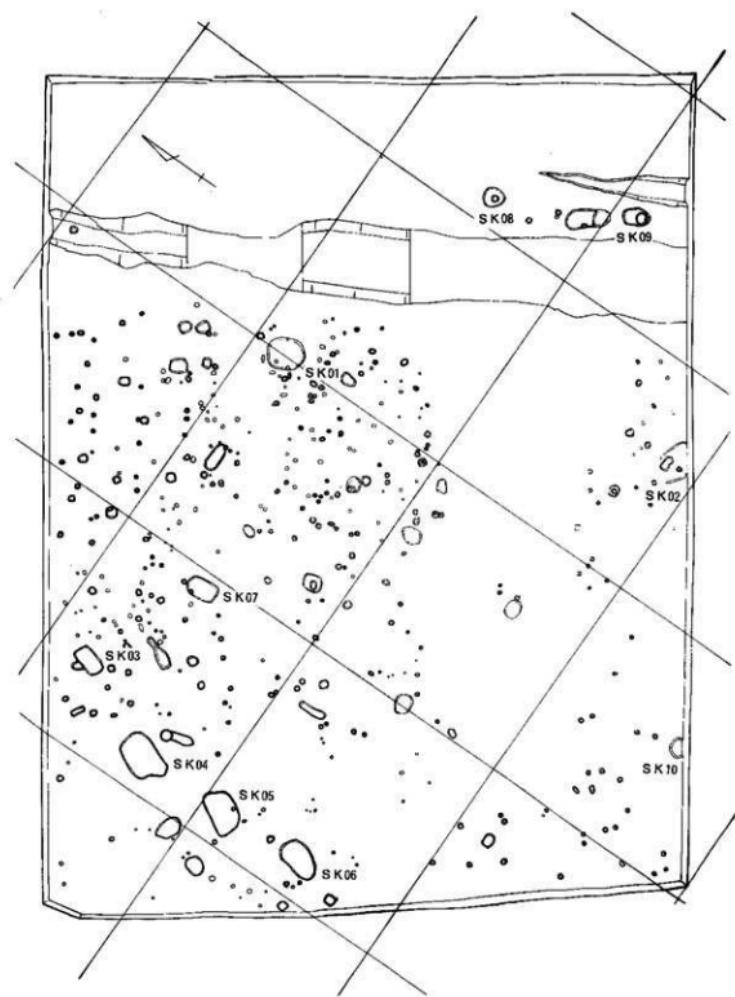
第Ⅶ層を掘り下げ地山を検出したところ、多数の柱穴と土甃を検出し、昭和60年度の調査と同様に、この検出面が第III造構面であることを確認した。

調査区の東部には、先の調査で確認した溝の基底部が残されており、その西方に集中した状態で第III造構面の柱穴群・土甃群が存在する。

造構の詳細は以下の通りである。



第2図 調査区位置図（約4千分の1縮尺）



第3図 調査トレンチ遺構図（約2百分の1）

SK01

土塙の中で最も東部に位置する。多くの土塙が梢円形の平面を呈する中にあって、正円形に近い平面を示す。東西1m45cm・南北1m72cmを測る。土塙の深さは約15cmを測り、中央部が幾分深い。意構の内部には直径20cm程度のビットが2つ認められるが、いずれも上塙埋土上面からの掘り込みである。

SK02

トレンチの南端中央に位置する平面梢円形の土塙である。東西1m95cm・南北1m40cmを測る。土塙の深さは約18cmを測る。遺構の内部には直径20cmのビットと、直径40cm前後の並存するビットが認められる。前のビットは埋土上面から掘り込まれており、後のビットは土塙基底部で検出され、土塙に伴うものと考えられる。

本調査で唯一の実測可能な繩文式土器が出土している。土器は深鉢の器形を呈し、口縁部内面に一条の沈線が巡る。土器は無文である。

SK03

トレンチの西端部において南北に並ぶ4つの土塙を検出し、北から順にSK03・SK04・SK05・SK06とした。

SK03は西隅するビットの埋土上を掘り込んでおり、平面長方形を呈する。東西80cm・南北1m40cmを測る。基底部は水平に近く、深さ約12cmを測る。

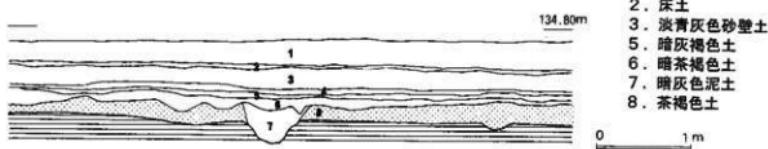
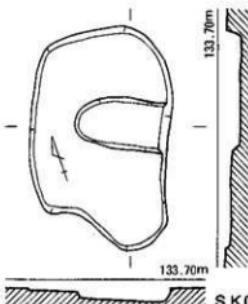
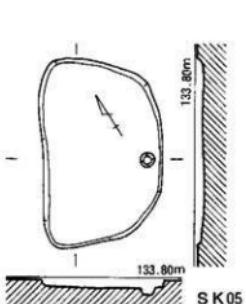
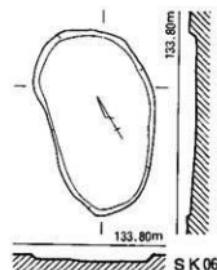
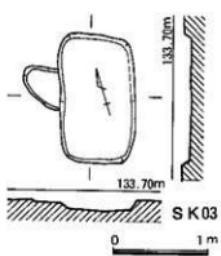
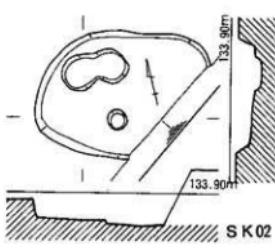
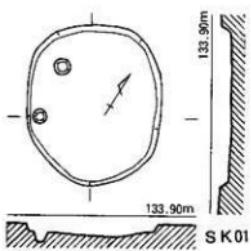
SK04

長方形に近い平面形の南東部が南へ突出している。東西1m45cm・南北2m40cmを測り、検出した土塙の中で最も大きい規模を持つ。

土塙の基底部は水平に近く、深さ約10cmと浅いが、中央東寄りに東西1m05cm・南北55cmの落ちが伴う。

SK05

西辺が直線に近い平面梢円形の土塙である。東西1m30・南北2m05cmを測る。土塙の基底部は水平に近く、深さ10cmを測る。



第4図 土壠遺構図及び土層堆積図

基底部の東端中央には、直径15cmのビットがある。このビットは基底部の精査時に検出され、土塙に伴う可能性を持つ。

S K06

トレンチの西端中央に位置する土塙で、楕円形の平面を呈する。東西1m25cm・南北1m98cmを測る。土塙の基底部はほぼ水平を呈し、深さ約10cmを測る。

S K01～S K06の6つの土塙については若干量ながら繩文式土器を出土したが、いずれも細片のため図化できない。

S K07

トレンチの中央北寄りに位置する土塙で、楕円形平面を呈する。東西95cm・南北1m55cmを測る。土塙の基底部は、中央が凹んでおり、深さ約18cmを測る。

土塙内からの出土遺物は無い。

S K08

溝の東部に位置する土塙で、北寄りの遺構。正円形に近い平面を呈する。東西95cm・南北1m05cmを測る。土塙の基底部は水平で、中央に直径約30cmのビットを伴う。ビットの埋土は、土塙の埋土と等しく、深さ約25cmを測る。

S K09

S K08の南側に位置する土塙で、楕円形の平面を呈する。東西85cm・南北1m30cmを測る。土塙の南部には、東西40cm・南北40cmのビットが伴う。S K08同様にビットの埋土が土塙埋土に等しい。土塙の深さは約30cmを測る。

S K10

トレンチの最南端に位置する土塙で、正円形に近い平面形を呈する。東西95cm・南北75cm以上を測る。土塙の基底部は水平に近く、深さ約18cmを測る。

土塙内からの出土遺物は無い。

今回の調査で検出した遺構の概略は、以上の通りである。これらの資料を前回の調査に合わせて、再び麻生遺跡切土F地区の復原を試みてみよう。

まず第1遺構面の検出層位について補足すれば、第I層（耕土）と第II層（床土）を除去した段階で素掘小溝群の存在が認められる。この素掘小溝群は、SD49の南方、SD48の西方において顕著に認められる。この素掘小溝群は、第1遺構面の中で最も新しい時期の遺構であり、SB26及びSB27の廃絶後の土地利用を知る手がかりとなる。

第1遺構面は、素掘小溝群の除去によって平安時代後期の遺構面を完全に検出することができる。

トレンチの東部を南北に走るSD48は、蒲生郡条里8条11里25坪と26坪の境界とはほぼ一致し、直交するSD49は同じく8条11里26坪の中心にあたる。この条里方位の溝は、本来は水田の用水としての性格を持つが、F地区においては、水田管理に付随する掘立柱建物（SB24～SB28）の区割りが伴う。

掘立柱建物は、条里方位に主軸を持つものと、異なるものがある。

前者にはSB24・SB26・SB27が含まれる。SB24は、南北4間（9.2m）・東西3間（7.4m）以上の総柱建物、SB26は、南北2間（4.95m）・東西4間（9.60m）の東西棟建物SB27は、南北2間（4.4m）・東西3間（6.65m）の東西棟建物である。これら3棟の建物は、SD48とSD49によって規制された建物であり、条里普及後の遺構として理解でき、後者の掘立柱建物より後出する可能性が強い。

掘立柱建物の拡がりは、トレンチの東西南北の各方向に予測されるが、トレンチの西方にはSD51をはじめ、L字形に屈折する区画溝が二箇所に認められ、トレンチ西方を中心とした蒲生郡条里8条11里26坪の全城に建物の拡がる可能性が高い。

したがって、これらの溝と掘立柱建物の遺構は、平安時代後期において普及の終えた蒲生郡条里の水田管理に付随する建物群と理解できる。

条里普及以前の遺構には、古墳時代後期のものと弥生時代後期のものがある。

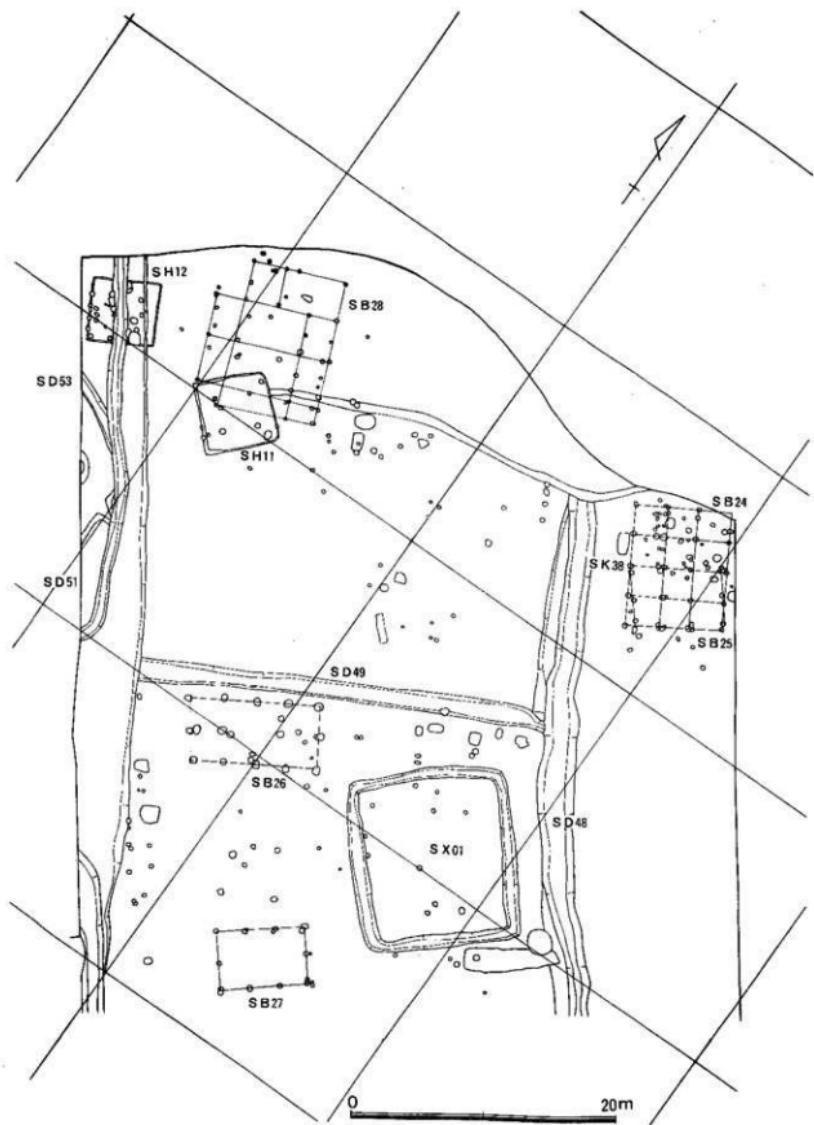
古墳時代後期の遺構には2棟の竪穴住居（SH11・SH12）がある。2棟の竪穴住居は、いずれも方形プランを有するもので、SH11は、東西辺5m60cm・南北5m80cmを測り、SH12は、東西辺5m10cm・南北辺4m82cmを測る。

SH11は、北壁の中央にカマドを持ち、住居の南半部に壁溝を備える。

カマドは、壁面に直交して造り付けられており、煙道を欠損する。カマドの天井部及び袖部は消失しており、墜落した構材・焼土が床部に堆積する。

住居の南半部を巡る壁溝は、住居南辺中央に約80cmの途切れを持ち、入口構造を備える。

またSH12は、床面上全面に炭化材が認められ、焼失して廃屋となつたと考えられている。SH12は、北壁の中央にカマドを持ち、住居の南壁東寄りに貯蔵穴を持つが、SH11に存在した壁溝は認められない。



第5図 F地区第1造構面

カマドは、壁面に直交して造り付けられており、平安時代の溝（S D51）の開削によって、煙道等を消失する。また同時に、天井部と袖部も欠損するが、床部の凹みは明瞭に残されている。

貯蔵穴は、上方が方形、下方が円形を呈しており、南北90cm・東西80cm・深さ66cmを測る深いものである。

日野川右岸第2段丘上には、カマドを持つ竪穴住居が多く存在する。この地域におけるカマド採用の初頭は堂田遺跡に認められる⁽³⁾。堂田遺跡では、5世紀後半代にカマドを持つ竪穴住居が出現し、統いて平塚遺跡・田井遺跡・麻生遺跡・外広遺跡と日野町田寺・下森遺跡へと普及する。

弥生時代後期の遺構には、3基の方形周溝墓がある。第5図に記したSX01は、うち最も北に位置しており、他の二基が南側に続く。

三基の方形周溝墓は、一辺約11m～16mの規模を持ち、1基は独立し、他の2基は共有溝を持って併存する。

日野川右岸においては、下流の市子遺跡において、弥生時代中期に盛んに方形周溝墓が築造される。これは、弥生時代中期後半（第VI様式併行期）に日野川中流域である市子遺跡・野瀬遺跡・アリヲヲジ遺跡に集落が出現することを二期とし、第2段丘裾部の低地の旧河道や沼沢地の縁辺に密集して築造される。

弥生時代後期に至ると、方形周溝墓の築造は分散傾向を見せる様になり、市子遺跡・呉媛塚遺跡では、麻生遺跡同様に2基～4基の小規模単位の方形周溝墓群が出現する。

以上の弥生時代後期から平安時代後期に至る時代幅の広い遺構が第1遺構面上に現れる。

次に第2遺構面については、第VII層（茶褐色土）の上面に構成される。

麻生遺跡の中で下層遺構（繩文時代）の確認されたのはF地区のみであり、岡本と上麻生の集落の間に、舌状に張り出した微高地に限られたことである。

第2遺構面の遺構は、南北約50m・東西30mに集中しており、竪穴住居・土塙・柱穴群・土器棺墓等を検出している。

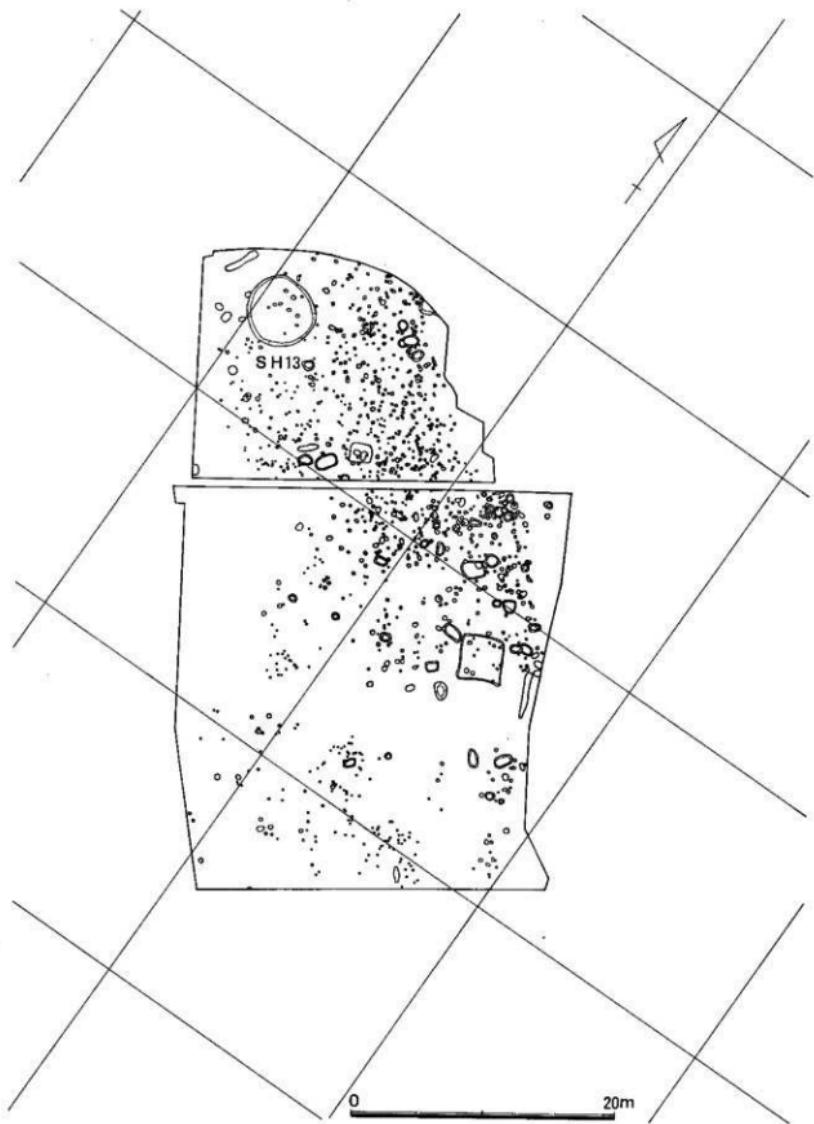
検出遺構の周辺には、多量のサヌカイトの剝片が散布しており、その一部に石匙・打製石斧が混在している。

柱穴群を構成する柱穴は、直径約20cm～30cmのものが多く、掘形には、地面に対して垂直なものと、斜角をなすものがある。柱穴底部の形状は、尖り気味に終るものが多いことから、柱材の先端があらかじめ尖らせてあることが判る。

柱穴の掘形の差異は、同一遺構内の構成箇所の相異と考えられ、垂直に立つ主柱と斜角をなす垂木がセットとなって住居を構成すると予測されている⁽⁴⁾。

竪穴住居として明確にされているのは、SH13の1棟のみである。

SH13は、直径約5mを測る平面円形の竪穴住居で、壁高約8cmと極めて浅い住居跡である。住居内部からは、サヌカイト製の打製石斧・石鏽が出土し、同時に多量のサヌカイトの剝片も出土している。



第6図 F地区第2造構面

竪穴住居（S H13）の周囲には、ベンガラを撤いた土塙や、上器棺墓等の墓塙と考えられる遺構も確認されている。

また、第2造構面からは豊富な遺物が出土している。

出土遺物のうち、土器の大半は深鉢であり、外面に条痕が認められる。また、深鉢の口縁部外面には、断面三角形の突帯が巡り、凸帯に刻り目を施すものと、貝殻状工事によって押圧を加えるものがあり、晩期後半の馬見塚式から五貫森式に併行するとされている。

石器には、石棒・凹石・石皿・用途不明石製等があるが、主たる製作はサヌカイト製の石鎌・石匙・打製石斧等に寄っていたと考えられる。

最後に第3造構面については、地山の明茶灰色土上に構成されており、南北約30m・東西約30mの範囲に土塙と柱穴群を括げている。

第3造構面の遺構の分布範囲と、第2造構面の遺構の分布範囲は、わずかに異なっており、その構成も土塙と柱穴群のみに限られ、竪穴住居跡・墓塙等は認められない。

土塙は約20基確認されているが、いずれも基底部までの深さが浅く、10cmを超えるものは、SK01～SK10の10基にすぎない。

土塙の形状には、平面形が正円に近いもの、橢円形のもの、長方形のものの三種があり、橢円形のものが最も多い。

土塙の基底部は、主として水平に近いが、一部にはピット状の落ち込みが伴っており、その性格や機能は不明である。

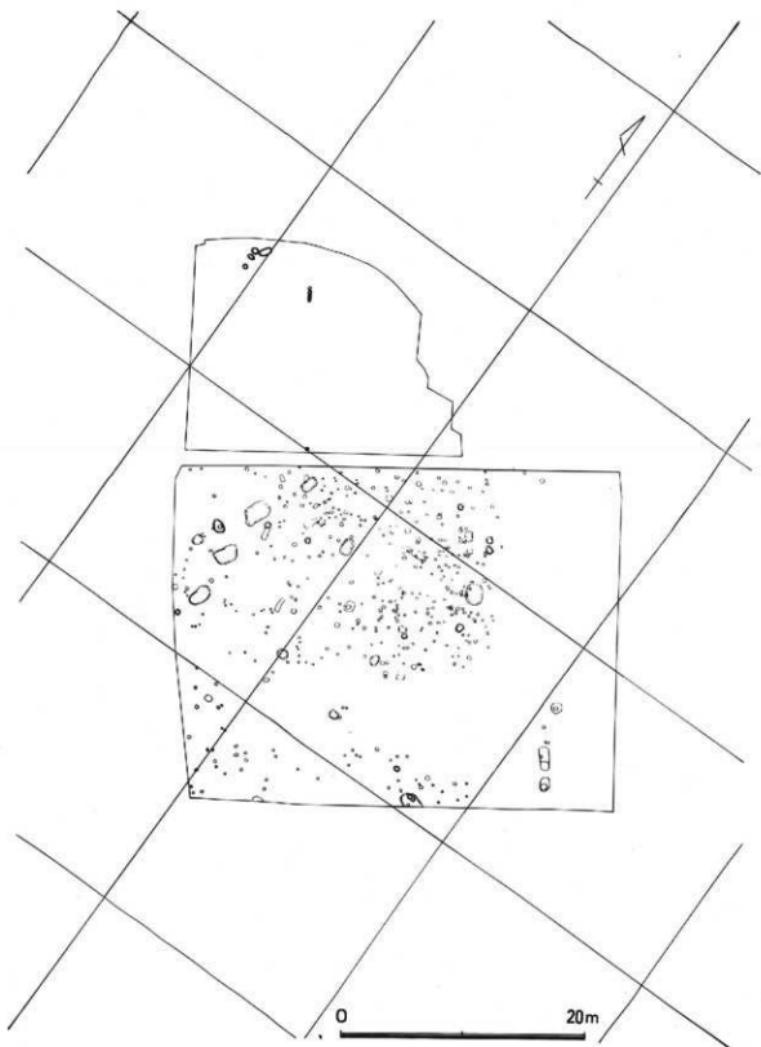
土塙の多くが浅い構造を示しているが、これは第2造構面の土塙や竪穴住居跡等に類似した傾向である。

土塙の配列には、法則性の無い箇所と、直線的に並ぶ箇所が認められる。多くの土塙の配列には法則性が認められないが、SK03・SK04・SK05・SK06の4基の土塙は、その長軸方位をそろえて、南北に直列する。

土塙の内部からは、若干量の土器片が出土するが、固化できるものはほとんど無く、SK02内から1点のみ図化できるものが出土している。土器は無文の深鉢で、口縁部内面に一条の沈線を巡らせている。土器には他に時代判別をし得る要素が無く、晩期の深鉢であるか、後期の深鉢であるか判断できない。

土器の他には、石器類の出土が無く、第3造構面全体を通してサヌカイト剝片が1点も確認されておらず、第2造構面と大きな傾向差が認められる。

柱穴群の多くは深さ20cm～30cmを測り、掘形の形状が、地面に対し垂直なるものと、斜角をなすものが認められるが、9割の柱穴が地面に対し垂直に掘られている。

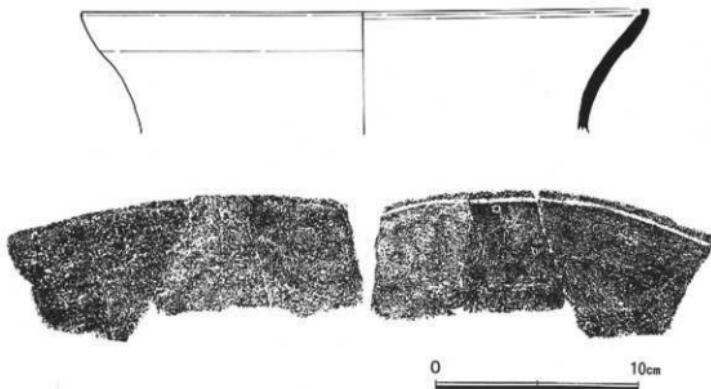


第7図 F地区第3造構面

3. ま と め

今回の発掘調査によって、昭和60年度に指摘された麻生遺跡の切土F地区第3造構面の全容を明らかにすることができた。第3造構面の存在は、土層堆積状況と造構の傾向差から明らかに第2造構面に先行するものと確定されるが、その年代は縄文時代晚期後半以前としか判定し得ないものである。後続する第2造構面（縄文時代晚期後半）には、サヌカイト製石器の製作を伴った居住区が明らかにされるが、第3造構面からは出土遺物が少なく、造構の性格は墓塚の混在する居住区として一応の理解としたい。

蒲生町内では、近年の調査から縄文時代晚期の遺物が数点発見されている。1例は市子遺跡北西部において、弥生時代中期後半の方形周溝墓の周溝内より馬見塚式併行期の深鉢が出土しており^⑤もう1例は同遺跡南東端部の河川跡から、外面に条痕を残す土器が石棒と共に出土している^⑥。麻生遺跡の第3造構面の造構群は、これら蒲生町内所在の縄文遺跡に先行する存在であり、日野川右岸第2段丘の開発を知る好例となった。



第8図 出土遺物

注

- (1) 「山部神社中世文書－蒲生町下麻生－」 蒲生町教育委員会 1984年。
- (2) 地区割及び遺構番号については、昭和60年度調査に従った。
岡本武憲「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 X VI - 5 一蒲生郡蒲生町麻生遺跡－」
滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1987年。
- (3) 宮崎幹也「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 X V - 3 一蒲生郡蒲生町堂田・市子遺跡－」 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1988年。
- (4) 前掲書(2)。
- (5) 宮崎幹也「蒲生郡蒲生町市子遺跡」(『県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書 V』 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1988年。)
- (6) 昭和61年度蒲生町教委調査及び昭和62年度滋賀県教委調査による。

図 版



調查前狀況



調查前狀況



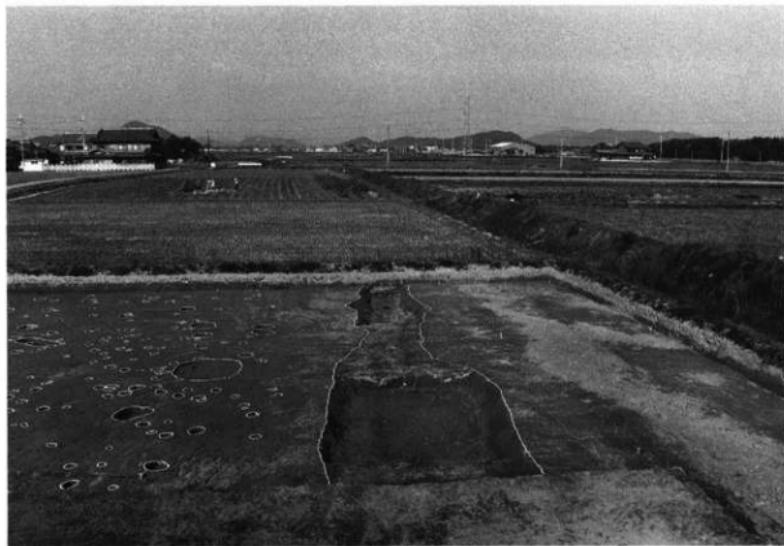
北区全景



北区遺構配置状況



北区全景（西より）



北区



北区 遺構検出状況



北区 柱穴群



北区土塁群



北区土塁群



土塁



溝



土層断面（南より）



溝



南区 遺構検出状況



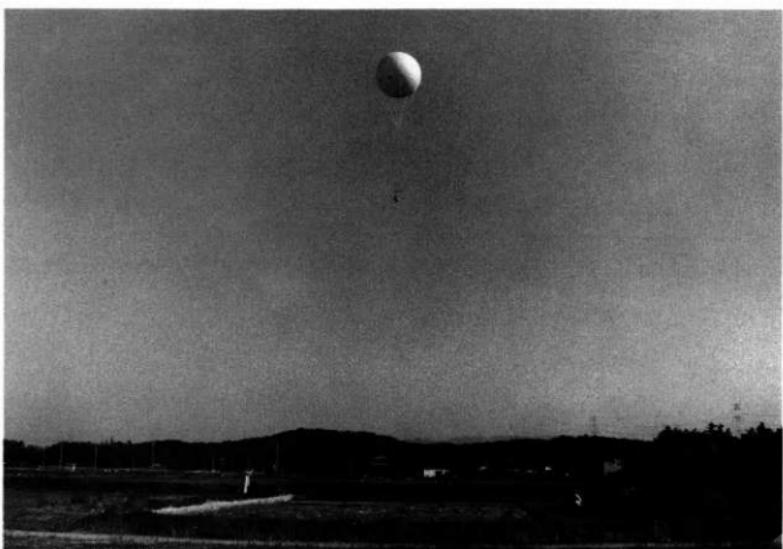
南区全景



土塙



土塙



空中写真測量実施風景



免掘調査風景

平成元年3月

は場整備関係遺跡発掘調査報告書 X VI - 4

麻 生 遺 跡

——蒲生郡蒲生町上麻生所在——

編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課

大津市京町四丁目1-1

電話 0775-24-1121 内線2536

(財)滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町1732-2

電話 0775-48-9781

印 刷 所 明 文 舎 印 刷 商 事 株 式 会 社

長浜市朝日町22-16

電話 0749-63-1441㈹